

1. テキスト

「表現作用」「七」。第2段落。170頁6～13行目まで。

2. テキスト解釈

第1段落の振り返りが行われた。ここではこれまでの総括と「すべての作用の終極」としての宗教について述べられる。この総括はこの時点での西田の哲学体系を極めて簡潔に表現している。

働くものは時に於て働き、時は自覚の形式であって、種々なる作用は自己が自己の根柢に還ることによって成立すると考えることができ、機械的作用から合目的的作用に、合目的的作用から意識作用に、自己の根柢をなす意志の自覚によって、抽象的作用から具体的作用に至るのである。之を時が時自身の内容を得ることによって、種々なる作用が成立するとも云い得るであろう。併し自覚の最も深き根柢には自覚其者をも否定した立場がなければならぬ、即ち意志否定の立場がある、此立場に於て我々は自己其者をも対象化し得るのである。此立場が即ち直観の立場である。此立場からしては、時其者も消滅して、万物は表現となる。見られるものが見るものより大なる場合は云うまでもなく、見るものと見られるものが一つと考えられる場合も、尚真の直観とは云われぬ、見るものが見られるものを包む時、始めて真の直観となるのであろう。此の如き直観の立場が宗教の立場とも云うべきであろう。自己自身によって存在し、自己自身によって理解せられる真の实在は、自己自身を表現するものでなければならぬ。

「見るものが見られるものを包む」表現作用には言語作用、芸術、道徳的行為も含まれる。しかし内容、作用、表現其者が一つとなって实在界の全体を、しかも可能性においてではなく現に包むものとしては宗教あるのみだというのが西田の主張である。内容、作用、表現其者が一つである例として、この論文冒頭に「感情の表出作用」が挙げられていたが、实在界の内に埋没した我々の日常性がこうした一如性を示しているであろう。これに対し宗教における一如性ではどこまでも「見るもの」（意味、理想的なるもの）が「見られるもの」（实在界）を包んでいる。かかる仕方では「万物は表現」であり、ここに自由がある。こうした宗教の立場が日常性ならぬ〈平常性〉であろう。

ところで「見るものと見られるものが一つ」ということが集中・没頭・茫然・自失状態といった〈日常性〉を性格づけるのに対し、「見られるものが見るものより大」とは实在界が、知識我にせよ意志我にせよ、我より大なる反省の状態を性格づけるであろう。また表現作用を性格づける「見るものが見られるものを包む」という表現は後の、術語面が主語面を包む、と云った表現に発展するものであり、場所論の成立を論じる場合に見逃せない。とは言えこうした思想も『善の研究』の内にその原型をもっている。第3編第3章「意志の自由」で西田は「意志の自由というのは…自己の自然に従うが故に自由である。…よく理由を知るが故に自由である」（岩波文庫改版 153, 9-11）と述べているが、この「知る」が必然的な「現実」を包んでいるのが自由だということである。

さて第1段落では機械的作用、合目的的作用、意識作用、表現作用、さらに表現作用の中で言語、芸術、道徳、宗教というように段階を踏んでいて、先に出てきたものが表現としては不十分であるという叙述の方法がとられている。表現作用の立場に到達した読者はさらに飛躍を経験しながらではあるが、言語、芸術、道徳と、どこまでもより深い境地を目指していく。しかし最後の宗教においてはすべてが一者の表現ということになる。そこに深淺の区別はない。すなわち日常性、反省、表現作用（直観）のすべてにおいて深淺の区別がないだけでなく、その表現の仕方、すなわち言語、芸術、道徳、（さらに所謂「宗教的世界観」と呼ばれるものも）においても深淺の区別はない。したがって自らの立場が深いという自覚もない。逆に言えば境地の深淺が問題になっている間、そこは究極ではないということになるだろう。まさしく〈平常性〉である。

因みにこの表現作用の領域はヘーゲルの絶対精神の領域（芸術、宗教、哲学）を思わせ

る。ただし後期ヘーゲル哲学においてすべては哲学的（学的）な表現であって、こうした領域と〈生〉そのものはどこまでも区別されていたのに対し、西田の宗教の立場はどこかに一定の立場というものを持たず、生と一つになっていると言える。しかし西田はこうした宗教それ自身が哲学へと進まなければならないと考えていた（昭和2年7月2日久松宛書簡）。

さてテキストでは「私はすべての作用の終極とも考うべき直観から出立して、逆にすべて作用と云われるものを不完全なる直観として考え得るではないかと思う」と述べられて、第2段落に続くことになる。

（第2段落）

ここでは「不完全」な作用がこれまでの叙述とは違った構成で述べられている。それは内容、作用、表現其者という、表現作用を構成する三つの契機に即して、その無媒介の統一態から分裂を経て、再び統一態に還帰するという構成である。これを日常性への没頭から反省を経て、平常性への還帰への道程と解釈することもできよう。

最初に来るのは、冒頭にあった「感情の表出運動」とは異なり、「色や音の経験内容」である。しかし「直接の経験として見れば」という条件が付いている。その場合「色が色自身を、音が音自身を見る」ないし「自己自身について述語する」ことになる。ここには「未だ意識的自己があるのではない」。「感覚作用」というのはこうした事態を「自己の立場」から言ったものにすぎないとされている。それ故この立場は反省（「意識的自己」）以前の〈直接経験〉ないし〈純粹経験〉の立場である。そのことは「色や音の経験内容というものも、直接の経験として見れば、エーテルや空気の振動という如きものよりも根元的な事実」（170, 6-7）という表現が、『善の研究』第1編第1章冒頭「色を見、音を聞く刹那、未だこれが外物の作用であるとか、我がこれを感じて居るとかいうような考のない」（岩波文庫改版17, 6-7）、第2編第3章の「恰も我々が微妙なる音楽に心を奪われ、物我相忘れ、天地ただ嚙喰たる一楽声飲みなるが如く、この刹那いわゆる真實在が現前して居る。これを空気の振動であるとか、自分がこれを聴いて居るとかいう考は、我々がこの実在の真景を離れて反省し思惟するに由って起ってくる」（同81, 2-5）に酷似していることから言えるだろう。

「かかる立場はすぐに表現の立場」であるが、「表現の内容、作用、表現其者が分化していない」。それ故西田はかかる立場を「広義にて自己が自己を否定し自己の中に自己を見る立場というべき」だとしている。だとすれば狭義があるはずである。その場合「自己が自己を否定し自己の中に自己を見る立場」とは「表現作用」すなわち言語・芸術・道徳・宗教の立場であることになる。広義に含まれ、狭義に含まれない立場と狭義のそれとでは「自己が自己を否定し自己が自己を見る」における「否定」の意味が違っている。前者では原始における自然性への埋没や、我々の日常性への没頭、あるいは何かへの集中、放心、習慣への埋没、痴呆などが「自己が自己を否定する」ということに含まれている。その中で無意識的に自己を見ている在り方である。これに対し狭義では、〈驚き〉や〈出会い〉におけるように、自己が否定せしめられるという形をとるであろう。そこに立ち上がる主語に成り切り、そのうちに自己を見出すことがそのまま表現となるのである。

さらに言えば前者は表現作用にも属さず、その意味では最も「不完全」なる「表現作用」ではあるが、こうした直接経験の立場は「すぐに表現の立場」となる、すなわち「感覚的内容は直ちに意味の世界に入り、言表作用の内容ともなる」とされる。最も浅いものと最も深いものとは、最も遠くかつ最も近いのである。それ故日常性の立場と宗教の究極的な立場（平常性）が最も遠くかつ最も近いのである。